
少年少女戦闘記

風斬黎歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女戦闘記

【Nコード】

N0236Y

【作者名】

風斬黎歌

【あらすじ】

13年前に京都で起こった悲劇から13年。16歳になった青咲天音は、刀の妖怪「瑠火」を体に秘めながらも、「人間」として、児童養護施設「あかる」の仲間とともに明るく生きてきた。

しかし、「瑠火」が高校の入学式直後の教室で出会った女子生徒から、異常な能力を感じ取り、天音に警戒するように告げる。その女子生徒がもつ能力は、教師でさえもねじふせてしまう、恐ろしいものだった…

第0章第0節 血涙辛苦（前書き）

はじめてここに投稿してみました。

書いているうちに、なんだか天音という女子学生が自分の中にかつこよくなっていく気がします。

残酷描写が苦手な方は、見ない方がいいと思いますが、刀や超能力の戦闘シーンが好きな人には、お勧めしたいです。

これからがんばって書いていきます！

第0章第0節 血涙辛苦

第0章第0節

血涙辛苦

1998年7月20日。「死者の魂があゝの世から帰ってくる」と言われるお盆休みのさなかにそれは起こった。

京都各地の名所から怨念の柱が立ち上り、小規模の百鬼夜行が大量発生して、京都府の中心に向かって行進をはじめたのだ。

機動隊と京都府警直属機関の殺人二課が全員出動し、各地の名所から半径1?を封鎖した。百鬼夜行をこれ以上拡大させないため、何より、府民の命を守るために。

しかし、住民の避難が間に合わなかった。多くの人が、「妖怪」が自分達を殺すかもしれないと言われてもなかなか信じなかったのだ。とくに若者は、警察が言っていることを的外れだと言って嘲笑った。本物の百鬼夜行を目の前にするまで…

絶叫と悲鳴が響き渡った。

大人も子供も殺された。子供は、殺される直前の両親の目の前で串刺しにされ、肝を奪われて死んだ。大人は、体を挟まれて、苦しみながら死んだ。

救い主など、いない世界がそこに広がっていた。

しかし、妖との戦闘を勝ち抜いた殺人二課の部隊が到着し、百鬼夜行の者どもは滅された。

百鬼夜行による犠牲者は、あまりにも多すぎた。だが、そのような血塗られた戦場の中で、生き延びた人間は確かにいたのである。

「お前さんも、敵か」

鋭い声で、老人は目の前に立つ男に問いかけた。

「いいえ。陰陽師です」

問われた男は、静かに答えた。しかし、男は内心戸惑っていた。

この老人は：腹に致命傷を負っていた。若者でも意識が飛ぶほどの深い傷だ。今頃死んでいてもおかしくない。そもそも生存する可能性は低い。老人は赤ん坊を抱いているが、一体どうやって赤ん坊を守りながら生き延びたのだろうか？

「：人命救助なら、わしは必要ない。あの世に逝くことは確定しているからな。しかし：アマネを連れていくわけにはいかない。わしが守り抜いた唯一のもの。わしの初めての孫だ」

老人の独白を聞き流して、彼は赤ん坊に目をやった。なんと、眠っている。何も知らず、何も感じずに：

「今日、生まれたばかりじゃ：可愛いだろう？」

「ええ、そうですね：って、え！？」

彼は、赤ん坊から流れ出る「臭い」に気付いた。

「あんたたちはまさか：！」

「アマネを殺さないでくれ、頼む！さっきも言ったように、わしの大切な孫なんだ：青咲奏純という男が、生きた証なんだ：頼む！」

「この子が将来人間として生きられないことを知ってて言ってるんですか！」

「：その時は、お前さんが殺してくれ。この子が殺人だの発狂だのはまずありえんがな。全ての責任はこのわしにある。この子は人間と変わらない人生を過ごす。絶対に発狂しない。わしが約束する」
老人はそう言い切った瞬間に、赤ん坊から顔をそむけて吐血する。

「ソウジュンさん！」

「頼む：この子を：この子が助かる見込みがつくまでは、わしは死んでも死にきれない：」

老人の目から涙があふれた。老人は、苦しそうにしながら、彼に

赤ん坊を差し出して、懇願した。

「わかりました」

彼は、断れなかった。老人のその目と涙と、傷を見て、どうして断れようか。彼は、どんなに冷酷な装いでふるまっても、やはり優しい男だった。

「おお：頼みましたぞ。その子の名はアマネ。天に響く音と書く。性別は女。どうか：頼みますぞ：」

老人は、この陰陽師に赤ん坊を託したわけではない。老人が、本当に信賴していた者は――

第1節 桜花高校入学式

目を覚ます。

天音は、やはり自分のベッドの上に転がっていた。何か夢を見ていたような気がするが、よく思い出せない。良い夢ではなかったと思う。

もう朝7時を過ぎていた。二人部屋のルームメイト、綾小路夢乃はすでに起きていた。眠そうに目をこすりながら、真新しい制服に着替えている最中だった。

「おはよう、天音――」

「おはよう」 天音は微笑んで挨拶を返した。

今日は、桜花高校の入学式だ。

この日のために、天音は自分の髪を黒染めしていた。諸事情あって、生まれつき赤毛なのだ。めったにない赤い髪と、外国人に似た顔立ちと、長身のせいで、彼女はまるで外国人のように見えた。その風貌は、髪の毛に黒染めを施しても変わらなかった。

「今日の高校は設備が綺麗なんやって！」

「……そりゃあ、私立やからなあ。公立高校よりかずっとお金の余裕はあるやろ」

夢乃の長いおしゃべりに付き合いながら、天音は学校に向かった。学校に着くと、二人は昇降口の壁に張り出されたクラス分け名簿に目を凝らす。

「……あった。夢乃とは違うクラスやな」

「ええっ!？」

「大丈夫、きっといい友達ができるさ。「小さくて」カワイイ夢
乃なら」

「小さいって言うな!」

天音は笑いながら、夢乃に背を向けて廊下を走った。

天音は、平和な高校生活を期待していた。今までの日常が、ことごとく荒んでいたからだ。黒染めを面倒くさがってほっといたのは大きな間違いだった。普通の人とは違う外見のために、不良や性根の悪い女子たちに目をつけられ、何度も彼らと戦わなければならなかった。

しかし、この高校は校則は厳しいが、生徒の品行はよく、タバコや麻薬といった不良要素とは全く無縁だという。ましてや、苛めなどの生徒間の不祥事も、今まで一度も起きていない、と評判は最高だった。

彼女はルンルン気分で教室に入った。しかし、一番初めに、ある一人の女子生徒と目があつたとたんに、幸せな気分が吹っ飛ぶことになる。

「臭うぞ、あの女…心の闇が異常に広がっている…あのような子供が異能の力をもつては、大変なことになる」

天音は、うんざりしながら、学校の受付で指定された席に座った。ちょうど、目があつた女子生徒のすぐ前の座席だった。

(それはどういうこと?)

「あの子には関わるなよ。あの子は厄介な能力をもっている」
(どんな能力があるって? 全く…)

「簡単に言うと、全てが思い通りになるんだ。例えば、嫌いな奴に対して、「死ねばいい」と思ったことはあるだろう？あの子がそう思ったら、あの子に嫌われた奴は24時間以内に死ぬってことさー

（それはまた…嫌な能力だな）

そうした秘密の会話の中で、天音は早くも自分の望みがかなわない嫌な予感を感じていた。そういう類のものとはあまり関わりたくないし、関わるきっかけがあるとも思えなかった。

けれども…そんな非現実的な存在とは知り合いたくないといくら天音がのたまって、天音自身が「人外が存在」なのでどうしようもない。いくら人間としての生活に慣れても、人間の友達ができて、異形は異形だった。

青咲天音は人間ではない。

「真羅刀」と呼ばれる刀の妖である。戦国時代の戦に何度も使われた刀が、血の味を忘れられなくなり、自我を持って、人間に憑いてしまったものだ。本来、真羅刀に憑かれた人間は魂を乗っ取られ、発狂して、自ら「真羅刀」そのものの殺人鬼になってしまうが、彼女の場合は違った。

天音の場合、物心ついたときには、体の中にすでに瑠火がいた。赤い髪も、瑠火が天音を宿主として選んだ影響らしかった。けれども瑠火は、いつか天音の体内にいたのか、どうして天音に憑いたのに魂を乗っ取らなかったのかを、決して語ろうとはしなかった。だから、天音の出生については、天音が自分で考えるしかなかったが、最近ひとつの結論にたどりついた。

「どうも、生まれたその日から私は瑠火と一緒にいたらしい。

天音が狂っていない理由については、考えようとも思わなかった。

何故なら天音は、不良相手に瑠火を体外に出して威嚇したことはあっても、人を斬ったことはない。斬ったことがないならそれでいいじゃないか、と天音は考えを完結させてしまったのである。

さて、高校生活の始まりに話を戻そう。

瑠火が天音に警告していた女子生徒の名は、田山華。見た目はいかにもギャルっぽい感じで、規則の範囲内でうまくお洒落な髪型をしていた。少なくとも、おとなしい生徒とは思われていなかったが、成績もよく、一部の教師には気に入られていた。

しかし、田山は入学式から2週間目に、本性を現した。

入学してからすぐに、田山は取り巻きをつくった。その取り巻きには、男子も女子も等しく混ざっていて、6人いた。それだけならまだいいが、田山は次第に傲慢になり、取り巻きと一緒に、同じクラスの沢口志信という男子生徒をいじめ始めた。

一体その子に何の恨みがあるのかと皆が不思議になるぐらい、激しくその少年をいじめる。皆は見えて見ぬふりをしていたが、天音はそれを黙ってみていられるほど、田山を怖いとは思っていなかった。

放課後、沢口はいつものように、男子に無理やり立たせられ、男子トイレに連れて行かれようとしていた。それを、田山が奇妙な微笑みを浮かべて見守っている。

「…おい」

―やめろ、天音!―

「…なあに、青咲さん」

「なんでそいつをいじめてる？」

天音の思い切った質問に、空気がぴんと張り詰めた。

「…そんなこと、聞いてただですむと思ってるん？」

「思わない。田山さんはサディスティックな人みたいやからな。

だけど、はっきり言わせてもらおう。あんたがやってることは度を越

してる！」

「…皆」

田山の呼びかけに、女子がわずかに頷き、天音に近づいてきた。

「じゃあ、あんたもあたしらと「トイレ」に行く…？」

「…」

天音はにっこりと笑って、右手の掌を広げて見せた。不動明王の梵字がまるで刺青のように刻まれている。その梵字から、銀色の刃がすうっと突き出てきた。

「ひっ…！」

一人の女子が、怯えて後ずさる。天音の掌から出現した金属物質は、徐々にその姿を現していく。数秒後、天音は日本刀を手にしてすでに動いていた。

「えっ…まさか…きゃああっ！」

恐怖をあらわにする女子のみぞおちに、天音は日本刀の柄を突き立てて、彼女を気絶させた。

「だっ、誰か…！」

「誰かを呼びに行くの？誰かが来たって、銃刀法違反の証拠はどこにもないな」

「えっ？」

彼らが振り返ると、天音はすでに何も持っていない。丸腰だった。さっきまで、凶悪な武器をもっていたのに、いつの間に、どこへ片付けたんだ…？

田山以外の女子は混乱し、男子は沢口を放り出して、天音を取り囲み、無言で田山に指示を仰ぐ。

「…可愛がってあげて？」

田山は微笑みながら命じた。しかしその数秒後…

「ぐえっ！」

男子達が聞くに堪えぬうめき声をあげて、床にへたりこんだ。さ

すがの田山も青ざめる。

「今、私が刀を抜いたのにも気がつかないなんてね。まあそれが人間というものだけれど」

この2、3秒の間に、一瞬で彼らの急所を突いたというのか。

「ぼっ、化け物……!!」

残った二人の女子が逃げ出した。

「ちよっ、あんた達……!!」

「ばいばーい」と、天音は手を振ってのんきに見送った。

「……これで、二人だけだねえ？」

「……っ！」

「でも、私はあんたにどうしようという気はないよ？ 言っておきたかっただけ。私にはあんたなんか怖くないんだって、知ってほしかったんだ。……じゃあ」

天音はそれだけ言うと、呆然としている沢口と、気絶している男子達と、怒りに震える田山を残して、鞆を背負って悠然と立ち去っていった。

第2節 悪夢の再来

—あいつ…死ねばいいのに！！！！—

田山の思いが、とんでもない連続殺人事件を引き起こす。

—お前、バカなことしたよな…—

（なんでよ。当然のことしただけじゃん。なんでいけないの）

—俺はお前の為に忠告してやったのに。これからお前、大変な目に遭うぞ—

（何？私は何時間後に死ぬの？笑わせないでよ）

—ほら、もう目の前にいるぞ。あいつ、お前を襲ってくる—

「…えっ？」

目の前の工事現場で働いていた作業員が、作業を放り出し、突然ナイフを出して天音に駆け寄ってきたのだ。天音は驚いて身をおかわして駆け出した。しかし…

—追いかけてくる！？—

その男はなおもナイフを振り回して追いかけてくる。その後ろから、正気を失った作業員を、ほかの作業員が取り押さえようとしている。

「誰か警察を呼べ！」と怒鳴っている声が聞こえる。

…どういうこと？まさか、これが…！

—そうだ。田山の復讐がはじまったぞ—

…あいつ！こんなことで、殺人をする馬鹿なの？

一だから言ったのに：なんらかの原因で心を病んだ人間が、普通じゃない力を手に入れたらどうなるか。最初は戸惑い、だんだん使いこなせるようになってくると、途端にそいつは王様気分になる。誰も自分に逆らわない。周りが自分に従う現実を目の前にして、そいつはすっかり傲慢になる。

田山に嫌われ、死を願われた人間は、本当に24時間以内に死亡する。お前の場合、死などありえないが、やたらと俺を出して防衛したら、正当防衛の前に銃刀法違反で捕まるだろうな―

（はあっ！？っていうかなんで刀が日本の法律まで知ってるわけ！？）

―お前が出席していた「授業」というもので習ったじゃないか―
（刀って人の話をおとなしく聞いていられるんだ：じゃなくって、ここにいたら面倒だ、さっさと「あかる」に帰る！）

突然の出来事で興奮していた天音だったが、施設に帰り着いてからは、頭がゆっくりと冷静に回転をはじめた。

ナイフを振り回し、こちらに駆け寄ってくる男。

―目が合ったとき、あの目は正気ではなかった。

あれが、殺人鬼――：

もしあの狂気の源が、瑠火が言っているとおり田山華の能力の影響なのだとしたら、そいつは哀れな話だ。私にはどうすることもできないけれど。

「天音―？」

間延びした声が聞こえた。天音が顔をあげると、目の前に夢乃の

顔があった。

「どうしたん？もうご飯やで？」

「ああ…もうそんな時間？杵子は今日のご飯何って？」

「今日は牛肉焼いたんやて」

「おいしそうやねえ」

親友の明るい声を聞いて、はじめて天音は安堵することができた。

天音は、物心ついた時からずっと施設で暮らしてきた。指導員の人たちが、天音に里親を斡旋してきたことはあったが、その度に天音は拒絶した。そのうち、指導員は天音に里親を勧めてこなくなつたので、天音は大満足だった。ここの生活は快適だったし、天音は自分にとっての母親は指導員の一人の伯方杵子だと考えていた。

たくさんの子供たちが「あかる」に入所してきて、また退所していったが、16年前からずっと一緒にいる5人のメンバーがいた。

綾小路夢乃は、天音と同じ年の女の子だ。ツインテールに髪をまとめて、眼鏡をかけている。天音にとっては一番近しい存在だ。

水流飛鳥は中学三年で、高校進学のために受験勉強中だ。長い髪をひとつの三つ編みにまとめている。気が弱くて大人しげだが、この飛鳥もまた杵子に懐いている。

瑞島悠里は、天音や夢乃と同年齢の男子である。最初は赤毛の天音を警戒していたが、一緒に生活するうちに彼女と打ち解けている。沢口昇は、後一年足らずで児童養護施設からの退所が迫っている18歳。高校卒業前に就職活動を始めたばかりだが、すでにとある工場への就職が決定している。

彼らは皆、天音の親友だ。そして、天音を含めた彼らには皆、共通した秘密がある。だからこそ、彼らの絆は固かった。

田山の能力は、どこまで影響するのだろうか？自分だけならまだ何とかなる可能性がある。しかし、友達が巻き込まれたらもういけない。その時は、今までハツタリに使っていただけの溜火を一…

第3節 誘拐犯の末路、黒幕の消失

楽しい夕食の後に就寝してから、数時間は経っただろうか。天音は、おかしい物音に目を覚ました。起きてあたりを見回すと、ルームメイトはぐっすり眠っている。部屋にも、どこも異常は見当たらないようだ。となると、物音は外から？

—どうやら、「お客さんだ」—

溜火のつぶやきが聞こえた。彼のつぶやきには、何か邪悪なものが含まれている。

溜火。駄目だよ？

—一応努力するが、もしもの時には—

天音は溜火のぶつくさを見せず、そっと部屋を出た。すると、物音ははっきりと聞こえるようになった。ガチャガチャと、鍵を回しているような音が玄関から聞こえてきていたが、バンツと大きな音がした。扉があげ放たれる音だ。

—泥棒！

天音は指導員を起こしに行こうとしたが、その目的を達するにはどうしても玄関前を通らなければならない。一階に、男性の指導員が寝ているからだ。しかし、泥棒に鉢合わせするのも面倒だ。ならどうすればいい？天音は迷いに迷って、ついに階段を下った。が―…階下には、天音が考えていた最悪のパターンが待っていた。

—「青咲天音か？」

知らない男がどうして私の名前を知っている???

「黙っているってことは、そうなんだな。…捕まえろ！」

ものすごくひそやかな、しかしはっきりとした男の命令で、部下と思われる男達が階段を上ってきた。天音は上に逃げようとしたが、足をつかまれて引きずり倒される。天音は、溜火を出して斬ってやろうかと思ったが、思いとどまった。

—もし施設の皆に知られたら？

その思いが、とっさの反撃を思いとどまらせたのである。天音がそうして考えを完結させた瞬間、彼女は殴り飛ばされ、意識を失った。

天音が再び目を覚ましたのは、廃墟の中だった。天音は片腕に手錠をはめられており、手錠の余った枷は、デスクの足をはめていた。人の気配がして、そちらの方向を見ると、男達が邪悪な笑みを浮かべて天音を見ていた。気持ちの悪い、撫でまわすような視線が突き刺さる。男達の後ろには…

「お前…!!」

「お前じゃなくて、田山華っていう名前があるのよ。あなたは分かっているようにだからこの際教えてあげるわ。私に逆らった奴の末路を」

その言葉がまるで会図であったかのようになり、男達が天音を囲む輪をせばめてきた。彼らが何をしようとしているのかは明白だった。

「心配しないで？ あなたのお友達も、すぐあなたと一緒にになるわ」
「…うっさい」

「…斬っちゃったんだ、な…」

でも、違う手がまだあるわ」

「おま、え……っ！」

L

「これでわかった？ 私に逆らったらどうなるか」

てことだよ」

「何：あなた：何なの！？」

17

うーつと薄れていくのを。

華は急に怖くなった。こいつは一体何なの？

華は、天音に背を向けて逃げ出した。天音が追いかけると、華が階段を駆け下りていくのが見えた。天音はもちろん、階段をわざわざ駆け下りて追うようなことはしない。それよりもっと効率的な追跡方法がある。

「!」
「?」

華は、目の前に飛び降りてきた天音を見て慄然とする。人間がで
きることはない。

「ばっ、化け物……っ！」

「…発狂した現場作業員に殺されかけたり、不良にからまれたりしたのは、皆、あんたの能力やってことは全部わかってる。でもなあ…それは、私には効かない。力の差が違うんだよ」

「あ……あ……つ」

「殺すことが楽しいくせに、自分の命の危機を感じるときは怖い
んやあ……ふうん……人間じゃなかったら殺してるところだ。人の日
常を邪魔すんな」

一怖い：怖い：誰か来て：誰か助けてええええええええええ

！！！！！！！！！

ガクン、と建物が大きく揺れた。

「なっ!？」

「えっ……？」

振動は止まらずに、激しくなる。

（外に誰かいるのかっ!?!）

コンクリートや木材の破片が降ってきた。何故か、破片のひとつひとつが燃えている。踊り場の窓ガラスが割れて、太い触手のようなものが押し入り、華の体に巻きついて体を拘束した。それはまるで、巨大な生き物の尻尾のようで――

（まづいっ!）

考え込んでいる暇はなかった。上から天井そのものが降ってきたからだ。天音は天井を斬り裂いて空中を舞い、「見た」。

体全身から光を発する、巨大な何かを。そして、天音の背丈ほどもある金色の目を。華がどうなったのかなど、考えたくもない。

巨大な何かを見た瞬間、天音はいきなり全身にしびれが走ったように思った。体が動かなくなり、そのまま転落がはじまる。意識も薄らいでいく。

一駄目、だ…落ちる!―

第4節 記憶の欠片

問答無用、ただ空っぽの自分を満たすためだけに人を斬ってきた日々。

一殺さないで、死にたくない、まだ生きたいと、彼らは泣き叫んでいた。

もう、あのような日々には二度と戻りたくない――

「お前は、多分これからその欲望が満たされることはないだろう。斬っていても自分が辛いだけだ。それとも、お前には心がないのか？」

―ある！だからこそうして話せている！

「ならば、「守るために斬る」と考えたことはないか？」

―守るために、斬る……？

「そうだ。お前は、私の先祖が造ったのだろうか？なら、私達を守れ。お前の本来の役目は、人を斬ることじゃない、妖を斬ることだ！」

何故。

何故、目の前に魔物が迫っているというのに、彼は冷静でいられるのか。

何故、人ではなく妖に対して、「斬りたい」と思ったのか。

それは、本来の私が、「降魔剣」であつたからに他ならない。そして彼は、私とその魔物を退治してくれると確信していたのだ：

彼は、私の本来の役割を思い出させ、私を、殺人衝動から解き放ってくれた。

だから私は誓つたのだ。芽生えた自我と心と、もつ力全てを使つて、蒼崎の子孫を守ろうと。

死なせなどしない。絶対に、死なせない。

「…：？」

目を覚まして、まず見えたのは白い天井だった。薬の臭いがする。横を向くと、夢乃が椅子に座ったまま、こっくりこっくりと頭を傾けて居眠りしていた。

「あれっ…夢乃！？田山は…あれは…！？」

「んっ？起きたあ…：？」

夢乃は、危うく壁に頭をぶつけるところだったのを、背筋をまっすぐに立てて回避し、怒った顔つきで、天音を見た。

「もう！心配したんやで！泥棒には入られるわ、天音は誘拐されるわ、矜子が半狂乱になるわ、本当に！」

「…心配してくれるの？」

私は、田山を殺す為なら、さらわれたコトも幸運だったかもしれないとさえ思っていたのに。夢乃は、何か知っていただろうか？同じクラスではないが、田山のことは噂程度には聞こえているだろうか？

「…田山に、狙われてるんだってね」

「…知ってたの？」

「さっきから疑問形ばっかやん。…知ってたよ。噂で聞いた。田山は、一度思ったことを現実世界に実現させる能力があるんやって。でもな、そこでうちが疑問に思ったこと言ってあげようか？」

—…田山に「死ねばいい」って思われた人が死ぬって言うんなら、なんで天音は死んでない？」

「…何？私に死んでほしいって？」

「！ううん、そういう意味ちゃう！ただ天音だけが、田山の能力の影響を受けていないとしたら、何か天音にも事情があるんかなって…」

実は、事情は大ありである。

影響を受けていないのは、瑠火がその刃によって彼女のピンチをぶった斬っているからだ。しかし、天音にどうしてそんなことが言えようか。

「…私にも、秘密はある。夢乃にも言えない秘密はある。けどさ…探られるんは嫌いや」

「ごめん、あの…」

「気にすんな。…後どのくらいで退院できるって？」

「お医者さんは、奇跡的に軽い傷だから、そう長く入院する必要はないって」

「…そうか」

面会時間の終わりがやってきて、夢乃は帰って行った。

影響を、受けていないわけがない。受けていないのなら、あんな死地に追い込まれるはずがない。天音は、沈んだ気持ちを振り払うように、小机に置いてあったリモコンを手にとってテレビをつけた。ニュースキャスターが、切迫した表情で、新たなニュースを伝えている。

「えー、京都府の宇治市で、奇怪な連続殺人事件が起こっています。誰が容疑者なのかもわからない状態です。」

被害者は三十人以上にのぼり、それぞれが、全く違う手口で殺人鬼に襲撃されています。京都府警によりますと、共通しているのは、被害者の証言の中で、殺人鬼が「赤い目」をしていたということで、府警はこれを暴行を受けたことによる精神的ショックとみなし――」

「：これって：」

―精神的ショックではないな。

「全部、田山がやったっていうの！？」

―正確には、田山の能力の影響を受けた人間が、標的（お前）が見つからないので暴走したんだらうよ。

でも、いくらなんでもやりすぎ！私を殺したいからって：

―あっちも、最初はすぐに片付くだろうと思っていたらしい。連続殺人を計画していたとは思えない。

：っていうか、田山って生きてたんだ？あの後どうなったの：？
―俺にもわからん。ただ生きていることだけは確かだ。

―：

「：どうなってるの？」

独り言のように呟いた華。いつもなら、その部屋の中にいるのは華だけである。てつきり、自分は死んだと思っていたのに。

なんで、生きてるの？

死ねると思ったのに、父さんと母さんのところに逝けると思ったのに。

しかし、数秒後に華の脳内から、物思いが吹っ飛ぶことになる。

「ええっ！？誰こいつ！」

華は確かにベッドにあおむけに寝ていた。しかし、華の腹の上に、誰かの頭がのっかっている。どうやら、ベッドの傍らに座っている

うち、眠ってしまったらしい。そして華の右手は、その男性の左手に握られている。

「ちょっと！離してよこの変態！」

その瞬間に男は吹っ飛び、床に尻もちをついた。思念実現能力が効いたのだ。

「その様子なら、もう元気だな」

かなり痛かっただろうに、そんな様子はみじんもなく、男はにばあっと笑った。

「…あれ？」

華は、自分の頭に手をあてた。一体自分はこうしたというのだろうか？

会ったこともないし、見かけたこともないはずなのに、私はこの男を知っている？

「…あのさ…もしかして、どこかで会ったことあるかな？」

気が付いたら、華は自分でも間抜けな質問をしていた。

「！」

男は弾かれたように立ち上がり、急いで訪ねた。

「覚えているのか！？」

「え？」

「俺の名は、アスター・セルトウーナ。他にも何か思いだせないか！？」

「えっと…ごめんなさい。会ったことがあるような気がするけど、思い出せない」

なんだか申し訳ない気持ちになって、華は謝った。

謝る…私が謝るなんて、何年振りだろうか。申し訳ないと思うなんて、何年振りだろうか。

第1節 石川悪四郎の息子、牙をむく

15年前。京都には、ひとつの有名な寺があった。

繁国寺、という寺だ。

歴史は浅く、明治の文明開化の時期に、国の繁栄を願って建てられた寺は、それからずっと、人々の信仰の拠り所となってきた。参拝する人も絶えなかった。

しかし、その寺は今存在しない。「あの日」に、僧侶たちは殺され、それから生き残った人々の努力も実らず、寺は廃れていったのだ。

その寺は今存在しない。敷地だけを残して、建築物だけが消えてしまった。広々とした敷地には、殺された僧侶達の怨みが宿っているとされ、誰も近寄らなくなった。実際、府警直属の「機関」も、繁国寺跡への接近を禁じていた。

ネットの闇の中でひそかに語り継がれる都市伝説によると、寺は今も「迷い家」として、京都のどこかをさまよっているという：

都市伝説は、真実を語っている。何故なら、百鬼夜行の総大将が、その迷い家を勝手に自分のものにして住んでいるからだ。

石川宗樹いしかわそけうきというのが、彼の本名。しかし、部下からは「主」とか、「おかしら」とか、ボスであることを現す呼び名で呼ばれていて、本名を呼ばれることはない。百鬼夜行の主であるため、もちろん人間ではない。

彼は今、畳であぐらをかいて、目の前に並べられた複数の写真を眺めていた。

「ほおう：美味しそうな生き肝をもっていそうな能力者ばかりだなあ：」

京都を制圧できるほどの力を得る為には、霊能力や、超能力をもった人間の生き肝が必要だ。陰陽師ともに保護されるまえに、彼らを奪わなくてはならない。全ては、15年前の父である石川悪四郎の敗北を挽回し、人間どもに復讐するため、そしてもう人間どもに侵略されることのない、永遠の楽園を造るため。

宗樹は、さっそく部下を呼んで、命令を下す。

平和だった天音達の日常が、ぶち壊されようとしていた。

―――：

5日ぶりに、彼女らは学校に登校していた。青咲天音と田山華は、お互いの生存に驚きながらも、たがいに口もきかずに自分の座席に座る。不幸なことに、天音の座席は田山のすぐ前だ。田山の取り巻きは、華の様子がおかしいことに戸惑い、田山に近寄っていくことができずにいた。

微妙な空気の中、先生が教室の中に入ってきた。

「今日は、転校生の紹介をします」

この一言で、湿った空気が吹っ飛ぶ。

「誰っ!？」

「男!？女!？」

「はいはい、皆さん静かに！はい、入ってきて」

転校生が入ってきた途端、天音と田山を省く女子が黄色い声をあげた。転校生は女子ではなかった。何より、日本人でもなかった。

天音は何とも思っていなかったが、田山は肝をつぶした。

(あいつ…っ！昨日のっ…！)

田山にとっては面識のある外国人―…アスター・エルトゥーナが、転校生として学校にやってきた。田山は急いで彼から目をそらし、窓ガラスの向こうを凝視する。

「新しい転校生の、アークス・サミュエル君です。サミュエル君は、両親がアメリカから転勤して、日本にやってきました。彼は日本語をちゃんと話せますから、皆仲よくしてあげてね」

―…天音。

何よ？

―このクラスは異形の受け皿か？

まさかまた妖…？関わりたくないんですけど、本当に。

一向こうにもバレていることだろうな、俺の存在は。

エ―――…

「座席は、田山さんの隣です」

一方、田山は、彼の座席が自分の隣であることに愕然としていた。先生にとってはどうでもいいかもしれないが、彼の行動によって、田山の立場は変わってくるのだ。例えば、彼がもし昨日のように親しく話しかけてきたとしたら、皆はどう思うだろう？影で自分がいじめてきた子が、もしかしたら自分の今までの暴挙を、彼に告げ口するかもしれない。

田山は、自分でも気付かないうちに、シャープペンの芯をペキリと折っていた。

何故だろう？何故かはわからないが、そんなことは絶対に嫌だ。イライラする。

…それは、まるで、彼が自分に対して冷たくなってしまうのが…

田山は激しく首を振った。

なら、最初にこちらから突き放せばいいのだ。そうすれば、彼は真っ黒な田山華を知らずにすむ。それでいいんだ。

というわけで、田山は、アスターが話しかけてくるのをずっと無視していた。アスターの顔を見ようとさえしなかった。それで、すっきりするはずなのに。

田山は、泣きだしてしまいたくなるくらい辛かった。

その一方、天音は、屋上に呼び出されていた。そこには、件の転校生が待っていた。

「…何か、用？」

「この姿では、わからないかな。俺はよく覚えている。貴様が華を殺そうとした時を」と、彼は流暢な日本語で言った。

「！」

瞬時に思いだした。天音は、一度、正体を現した彼に会っている。

「じゃあ、田山を尻尾で巻き取っていったのは…」

「ああ。華を貴様から引き離すためだ」

「…ちょっと待って、なんだか私が悪者みたいな感じになってない？ 私は、あいつによって廃墟に誘拐されて、ひどい目にあったよ。あいつの能力で部屋の中引きずりまわされて…」

「！？」

「私がやったことは、正当防衛だ！」

「嘘つけ！」

「嘘じゃない！」と、天音は激昂して叫んだ。

「何も知らない癖に知ったような口をきくな！ だいたい…あんたは田山とどういう関係なわけ？ 何の義理があってあいつを庇うの！？」

今度はアークスの方がうろたえた。

「話しても信じないだろうよ。それに、君に話す必要がない」

「信じない…？それは、違うな。だって、あんたの正体も分かってる」

「！見ていたのか…」

「あれを信じた時点で、これ以上何を否定しなきゃいけないのかな？」

「……」

「だけどさあ、田山は人を苛めているし、人を殺しているんだってことを、あんたも知っておかないといけない。それでも、あんたは田山を庇う？」

「……」

田山は、早々に学校を早退していた。脳内で渦巻く感情に耐え切れず、仮病を使ってしまって、今はとぼとぼと家路をたどっていた。何よりショックだったのは、華に対する取り巻きの態度が、いつもよりよそよそしかったことだ。

何を泣くことがある？

友達なんて、所詮そんなものだ。今日は、華自身も情けなくなるくらい、感情的になってしまっている。一体どうしたというのだろうか？

家に帰って、早く寝よう。再び目覚めたら、昨日と今日のことは夢だったって思うかもしれない。そう自分を励ましたところで、華はふいに寒気を覚えた。

夏なのに寒い。しかも、まだ昼なのに、段々空が暗くなっていくような…

―腹が減ったぞお―

欲しい…生き肝が欲しい…―

— おお… ちょうどそこに女がいるぞお… —

見たこともないぐらいおぞましい化け物が、じつと華を見ていた。

第2節 さあ、戦いを始めようか

「な、な…え…!？」

華は、目の前に一体何が立っているのか、一瞬だけ理解することができなかった。テレビで見たような、何かの本で見たような、化け物が、リアルな世界に立っている。

「どうして…」

今までの人生で初めて、華は我が身の不運を呪った。

どこから…どこから間違えたの!？イジメをやった時から？青咲天音を殺そうとした時から？…そうだ、きっとそうだ…あの女に出逢わなければ、私は、こんな化け物に追いかけられずに済んだのよ！どうすればいい、どうすればいい？このままだったら私は間違ひなく殺される…

消えて!!

華の能力が敵にぶつけられる。三匹の姿の輪郭が、激しく揺らいで、まるでズームアウトするように消えた。華の能力^{ねがい}どおり、本当に体が消えたのだ。

「……」

自分の能力の効力を知っているのに、華はまだ安堵しきれない。本当に、彼らは消えたのか。まだどこかに隠れているのではないか。

華の不安がまた的中した。商店街の影、建物の天井から、数えきれないほどの化け物が下りてくる。

嫌だ、全部消えて、消えて消えて消えて消えろおおおおお
おおおおお!!!

最大限に思念実現能力が影響し、化け物たちだけでなく、彼女のまわりの半径1?の商店街が消失した。だが……また新手が襲ってくる。華を取り囲み、段々と輪を縮めていく。こうして華はやつと、彼らは大多数で彼女を襲ってきていること、消しても消してもきりが無いことを知る。

一生肝をくれえ……

気持ちの悪い声が四方八方から聞こえてくる。

[illegible]

次の瞬間に、風を斬る音が聞こえた。またその次の瞬間に、彼女の足が地を離れた。華がおそろおそろ目を開けると、段々地面が遠のいていくのが見えた。

「えっ、えっ！？」

「怖がらないで、大丈夫だから」

聞きなれた声がある。

「あ、スタ……？」

「今日は、
どうして僕を避けた？」

「それ、は……」

言葉を切った華は下を見下ろす。大きな街の中に、大きくて真っ黒な平野ができています。そして、平野を取り囲むように、百鬼が並んでいて、呆然と空を見上げているのが見えた。それを見て、彼女は初めて安堵する。

私は、助かったんだ、と。

「どうして、避けた？」

一方で、アスターの声は微妙に平坦だった。

「それは、私がアスターと親しくなりたくなかったから…友達になつたら、アスターは嫌でも、私の本当の姿を知ってしまうだろうから…私は、醜いの。人を苛めて、人を殺して…この力があつたせいで、私は、私でなくなつたんだ。

それ、に…私は、貴方を、殺してしまうかもしれない…」

「どうして、そう思う？」

「だって…殺すつもりもなかったのに、殺してしまったことだつてある…私の両親だつてそうだった…」

「君の過去については、後でゆっくりとお聞かせ願おうか」
アスターは、ぐんと高度をあげて、華の家を目指した。

「天音。来るぞ！」

！

その時天音と夢乃は、教室で授業を受けていた。

「先生！トイレ行っていていいですか？ちょっとおなか痛くて」

演技をしているのも時間が惜しかった。許可をもらうと、天音はそうそうに屋上への階段を目指す。が

「おいそこ！」

何も知らない生徒指導の先生の邪魔が入った。

「トイレはあっち、さっさと授業に…ぐえっ!？」

何も知らない先生は、窓ガラスをたたき割って入ってきた何かに首もとを噛みつかれる。牙が声帯まで達したのか、先生は自分に何があつたのか全くわからないままに死んでいった。天音は、一瞬目の前で起こった出来事が理解できなかったが、自分にもその「なにか」が向かってきたのを見て一刀両断で斬り捨てる。

生徒全体がパニックに陥るのに、そう時間はかからなかった。

天音は、急いで夢乃がいるはずの教室に駆け込む。クラスメートのことなどどうでもいい、ただ共に「あかる」で暮らしてきた、夢乃が心配だった。

夢乃は、無傷で済んだわずかなクラスメートと肩を寄せ合って集まっていた。彼らの周りを、金色の結界が取り囲んでいる。それを、教室の天井にも届くグールが破壊しようとしていた。何度も何度も結界にタックルして、結界を壊そうとしている。

天音は駆け寄って、刀を振るってグールの懐に斬りこんだ。しかし相手もそれぐらいで倒れるような相手ではない。起き上がって、天音をターゲットにして襲ってきた。天音はまた刀を振るって、グールを真っ二つにする。

「すごいねえ、青咲天音…だが、所詮は「真羅刀」のなりそこないだ」

若い男が、窓ガラスに腰かけていた。少女を抱きかかえている。少女は頭から袋をかぶせられて、顔は見えない。

「…百鬼夜行の、総大将？」

「そうだよ。私は石川悪四郎の息子、石川宗樹。…またの名を、酒天童子。君は、歴史の教科書ぐらいは読んでいるだろう？」

「もちろん。…だけど、その総大将様がしない学校に何の用なんだ」

「かつて私は、源頼光を頭とする四天王によって、死んだも同然の窮地に追い込まれた。あの時、私から靈力を徹底的に奪い去った降魔剣を…青咲、貴様はその手に握っている」

「!？」

瑠火が、酒天童子を斬ったの!？

「まあ、そうだな。記憶はあるが、その時俺はまだ自我を持たなかったからなあ…」

「まさか、降魔剣がその後に人殺しに使われて化けるとは思わな

かったがなあ。それでも私にとって、貴様が脅威であることに変わりはない。しかし：貴様だけを殺すのは物足りん。昔のように、女子を頂いてゆけば、お前も少しは心を痛めてくれるか？」

「！」

「この女：確か、水流飛鳥といったな」

「！！！！！！」

何故飛鳥がここで気を失っている？今頃飛鳥は、学校で真剣に授業を聴いているはずなのに、どうしてここで、制服のままぐったりと敵の腕の中で眠っている？

「聞こえてるんだろう、溜火。よく覚えておけ！貴様の心を徹底的に壊しつくし、もとのような殺人鬼に引きずり戻してやる。そうしてその女の自我も消えてくれたら、調味料としては最高だ」

「：させない。そんなこと」

天音はとっさに斬りかかる。酒天童子はひらりと教室の窓から離れて、空中に立つ。少女は気を失ったままだ。天音も空中に降り立ち、二人が対峙する。

はつきり言って、天音は酒天童子などどうでもよかった。刀で彼をけん制して、ただ飛鳥を助けようとして手を伸ばす。がー：

「まずお前の相手は、本物の真羅刀だ」

横から第三者の攻撃が来て、天音は一瞬で身をかがめた。避けることはできたが、額から鮮血が散る。

「紹介しよう。彼は私の百鬼夜行の一人、闇の真羅刀だ」

黒く長い髪を伸ばしっぱなしにした、黒服の男。

男の瞳は、人間のものではなかった。獣のような目で、天音を睨みつける。天音が彼に気を取られている間に、酒天童子は姿をくらましてしまった。

「：いいじゃない。やってやるよ！」

天音は薄く笑って、刀を構える。

次の瞬間に、
橙色の光と漆黒の闇が激突した。

第3節 怖いのか怖くないのか

窓の外で起こっている光景を、夢乃は呆然として眺めていた。夢乃の視点からは見えていなかったが、町の各地で、異能力者が、妖に襲撃を受けていた。

夢乃が造りだした結界の中には、生き残った五人のクラスメートが残って、恐怖におびえている。誰ひとり口をきかない。気絶している者もいる。夢乃を含めた彼ら以外は、皆、結界の外で傷を受けて倒れていた。生きているのか、死んでいるのかもわからない。

結界術を夢乃に教えてくれたのは、15年前、まだ赤ん坊だった夢乃を助けたという陰陽師、土御門興亜だった。安部清明神社の神主にして、京都府警直属退魔機関に属している、警察関係者だ。妖が出没している今も、彼らは出動しているのだろうか。

……この窮地から、救い出しに来てくれるのだろうか？

結界術は、防御だけでなく、攻撃に応用することもできる。結界は自由に変形できるからだ。形を変形させて圧縮すれば、飛行することも可能だ。興亜が使役する式神に憧れ、弟子にしてほしいと再三頼んでいた夢乃に、彼はこの術を教えた。

だから夢乃は、その気になれば天音の援護をすることもできる。

しかし彼女はそこから動くことができない。

だって、あんなに殺気が満ち溢れる天音は見たことがなかったから。

だって、夢乃が動く時は、クラスメートを守っている結界を一旦解除しないといけないから。

なぜって、初めてのこの状況に怖くなったから。

次々と理由が浮かんできて、夢乃の本能が動くことを拒否する。

そのとき、ドン、と音が聞こえてまた建物が激しく揺れた。先生たちがどうなったのかなど考えたくもない。生存者たちがおびえたところで、またドンと建物が揺れた。

突然気がついた。誰かが、自分たちがいる階に近づいてきている。

斬りかかる。刀と刀が力をぶつけ合う。

男の体からにじみ出る黒い影と、女の体からにじみ出る赤い炎が、破壊と再生を繰り返す。男が己の技を出すまでに時間はかからない。黒い影が、天音の死角から足に絡みつき、敵を剣で押していた彼女を同じ立ち居地から引き摺り下ろした。まるでボールのようにはるか下の地面に向かって放り出されたところを、すぐに姿勢を立て直してそこから天音は反撃を開始する。

敵に向かって、刀を軽く振っただけだ。それなのに、異常な風圧が起こってまっすぐに襲い掛かっていく。敵は無言でそれを弾いて、攻撃は拡散されて空に散ったり、ビルに激突してそれを破壊したりした。

「何故人間のお前が真羅刀の技を使える？：お前は溜火のようで溜火ではない。何故人間のお前が正気を保っていられる！？」

「どうでもいい、そんなこと：今はただ、飛鳥のところに行きたいの。どうして私を邪魔するかな」

「私は石川悪四郎の遺志を継いでいる。その遺志を、人間どもにつぶされるわけにはいかん！」

「：どうでもいい」

背中の中の二つの個所から、翼にも似た炎が噴き出し、制服に二つの穴を開ける。天音は額に手をやり、目を閉じて、やれやれというふうに首を振った。

「誰もかれもが、私の日常を邪魔する。私はただ、普通に暮らし

ていただけなのに、普通に平和な生活を満喫していただけなのに、
どうして邪魔をするかな」

けだるげな彼女の背中で、炎が翼のように閃いた。「困ったな」
という表情で、天音は目を開く。その目は、ちっとも困っていないか
った。炎と同じ明るい橙色の瞳が輝いていた。

「できれば、私を舐めないでほしいかな」

「…貴様の素性についてはいまだに疑問が残る。しかし、本物
と同じくらい強いのなら…こちらもレベルを吊り上げるしかないな」
黒狼の背中から黒い翼が生える。正確には翼ではなく、闇と影の
塊が、まるで翼のように彼の背中から二つ、生えていた。

「貴様にわからせてやる。偽物と本物の力の差を」

———

教室の中で、夢乃達はすくみあがって結界の中で身を固めていた。

吐き気を催すような臭いが鼻をつく。天井に頭がこすれるぐらい
巨大な、化け物。アニメやホラーものの映画でしか見たことがなか
った、化け物が、ついさっきやっとな爆風を生き延びたばかりの生存
者に牙を剥いていた。

あまりのことに、夢乃以外のクラスメートが泣き出した。母親を
呼ぶ声、家に帰りたいという泣き言、それは夢乃のつきざるいら
いのものとなった。

「うるさい！」

突然の一喝に、彼らはしんと黙り込んだが、それでもすすり泣
きはやまない。

「あんたら、自分の身は自分で守れ」

夢乃は、クラスメートの服に次々とタッチしていく。彼らの服に「霊装」を施した。

「これで、あんたらはもう化け物に殺されたりせえへん。今からあいつがあんたらに触れたら、あいつは死ぬ」

「え…？」彼らは混乱した様子で夢乃を見る。

「今うちがやったのは、「霊装」って言ってな、ようするにあんたらの服に結界をつけさしてもらったんよ。その結界は、うちが「異常なもの」だと認めたやつは、徹底的に攻撃を反射する。敵の攻撃が、敵に返るってことだよ」

「…？？でも…」

「ええい、論より証拠、だったら実際にあいつに殴られてみる！」
そう言っ、夢乃はクラスメートの一人を結界の外に放り出した。放り出された同級生は、その瞬間に魔物に殴り飛ばされ…なかった。

「ひいいっ！…って、あ、れ…？」

逆に、彼を殴った魔物が、逆方向に飛ばされ、その体が壁にめり込む。

夢乃の結界術に勇気付けられて、彼らは最初はおそろおそろ、途中から全速力で廊下に駆け出した。一番最後に、夢乃が教室から脱出したが…

「あっ…！？」

起き上がった魔物に足をすくわれて、彼女は地面に倒れこむ。窮地を潜り抜けた彼らは、後ろを振り向かず廊下の角を回って消えていく。

足がそのまま持ち上げられて、逆さづり状態になった夢乃は、目の前に出現させた結界を瞬時に鎧に変形させて反撃に出る。

第4節 ただの人間になりたい

華は、自分のベッドでぶるぶる震えていた。

ついさっきまで、自分が殺されかけていたことを認めたくない自分がいる。ついさっき、アスターと名乗る男に助けてもらったことを素直に受け入れたくない自分がいる。その一方で、アスターをヒーローのように思う自分がいる。

「あなた：どうして私を助けてくれるの？」

青咲天音から聞いたんでしょう？私が裏でどれだけ汚いことをしていたか。当たり前のように、人をいじめて、殺してきたのに：どうして、まだ助けてくれるの！？」

「：君のその厄介な能力については、心当たりがある。僕は、まだ君が田山華ではなかった頃の君と、君の頭に細工した魔術師に会っている。僕は、君の魂の匂いと、君を廃人同然にまで追い込んだ魔術師の匂いを追って、日本に来た。：でも、今の君にいくら話しても、君は信じてくれないんだろうな」

「：？田山華では、なかったころ：？」

「今の君の頭が理解できるように言うと、前世の君のことだ」

「前世：？まさか、そんなのあるわけ：」「ところがあるんだよ」

神も仏も実在する。それこそ天界に、何百人もの神が住んでいる。前世も存在している。人は、一生のうちに成した善事と悪事で、次の転生先が神仏によって決められる。悪人だったものは、動物や魔物として生まれ変わるし、善人だったものは自分が望むように生まれ変わることができる。

そして、アスターは：

「君の言うとおりで。あの日の廃墟で、彼女とは初めて会った。その時、彼女が君を殺そうとしているように思えたんだ。そうなるまでのいきさつを知ろうともせずに、僕は彼女を一方的に敵と決めつけ、誰にも知られないうちに殺そうと思った。」

でも、彼女の口から真実を聴いて気が変わった。だからといって、華、あの時殺されかけた君を見捨てることはできなかった。もしかしたら、あの時君は、僕の背中にあるものを見てしまったかもしれない」

「あの時、アスターの背中に：翼が生えていた。こうもりの羽のような。アスター、あなたも奴らと同じような化け物なの？」

「：そうなる、んだろうな」

化け物と言われた瞬間、アスターは哀しそうな笑顔を浮かべて返した。

「だけど、知っておいてくれ。僕は決して君をとって喰うようなことはしない。こんなこと言うのは照れ臭いけど：君を死なせたくないんだよ」

「：：あなた、本当に私を信じているの？疑ったり、しないの？わ、私は：思ったことが本当に実現する力があるの。その気になれば、あなたをどうにでもできるんだって：」

「君は、そうしない」

「どうしてそう言い切れるの？」

「記憶は消えても、情動は残っている」

「：意味がわからない」

「僕にその能力を使うことを、君は嫌がっている」

アスターが言ったことはまさに凶星だった。

なんなら、こいつを奴隷にしてやろう。

そんな思考が完全に脳を支配する前に、別の思考がその思考を打ち消す。

嫌だ。

華は、初めてこの能力が鬱陶しいと思った。

超能力をもっている。ただそれを証明しただけで、人から羨まれた。自分はただの人間じゃないんだという思いは、いつしかおごりに変わり、華を変えてしまい、華に殺人をさせた。

しかし、今その思いは華の心にはない。

人とは違う能力を持ったって、ちっともいいことなんかなかった。

こんな簡単に、人を殺せる能力など、「要らない」

———ぱきんっ

華の頭の中で、何かが壊れる音が響いた。

第5節 その為ならなんでも殺す

夢乃は半分泣きながら、無我夢中で敵を刺した。細かい雹のようになつた結界の変形物が、魔物の体を何度も貫く。魔物がとうとう動けなくなつても、何度も何度も魔物を刺し続けた。魔物が、塵と化して空気に溶けてしまうまで。

「は…あ、あ…！あ、ぐっ…」

敵が消え去つたことを確かめた夢乃は、へなへなと座り込み、泣きだす。床に嘔吐物が飛び散つた。できることならこの恐怖と悲しみも吐き出してしまいたかった。

「…怖いカ」

人間の声が聞こえて、夢乃は反射的に振り向いた。

めっちゃめっちゃに破壊された教室の廊下。夢乃のすぐ後ろに、青年が立っていた。

「…興亜、さん…」

「気配に気づかないのはまだ未熟だったな。私が魔物だったら、ほんの数秒前にお前はひき肉になっていただろう」

夢乃は、一瞬、呆けたように、興亜を見上げたが、その時大きな爆音が聞こえて、校舎全体が大きく揺れた。その振動で、夢乃は初めて我にかえる。

「…！興亜さん、助けてください、うちの友達を…っ！天音も、戦ってるんです…！」

「助ける必要はない」

興亜は、夢乃の訴えを冷ややかに斬り捨てた。

「どうして…！」

「結界術を会得したお前なら、知っていたはずだ。蒼崎天音の正体を…」

興亜は夢乃を見下ろし、冷ややかに睨みつけた。

「覚醒したのなら、何故もっと早く教えなかった！あれに情けは無用なんだぞ！」

夢乃は、興亜の剣幕に、ビクツと震えて彼から目を反らした。

「だって…だって、天音は…さっきの奴みたいに、うちらを殺したりなんかしません…！」

「そういうものが一番危険なんだ。あれは、人間でありながら魔を宿した女だ。いくら無害でも、あの女が妖と人の抗争の真実を知ってしまったら、彼女はその時はじめて、「妖怪」になる」

「…だってっ！」

「あのまま生きていても、青咲天音が辛い思いをするだけだ。あれは使いようによっては人間の「武器」になりうるかもしれないが、それは彼女の体が妖化^{あやかしか}する危険が常についてくる。曖昧な可能性など無用なんだ、綾小路！」

「…できません…でけへんよお、そんなんっ…！そもそも、うちが結界術を身につけようと思ったのはっ…」

そこまで叫びかけたところで、夢乃ははっと口をつぐむ。

これだけは、口にしてはいけない。人妖である天音にあこがれて、結界術師を目指そうとしたなどと本当のことを言ってしまったら、破門だ。

「思ったのは、友達を助けられるぐらい強くなりたからでっ…友達を殺すためになったわけじゃ…」

安倍興亜のビンタが夢乃の頬を直撃した。

「あうっ…！」

夢乃はそのまま壁にぶつかり、ぺたりと座りこむ。

「…それほどまでに危険人物と慣れあいたいのなら、構わない。ただし、ひとつだけ約束しろ。あれが本当の「闇」に飲みこまれ、真の真羅刀になった時は…お前があれを殺せ、いいな！？」

「うっ…う…あっ…」

「殺人二課はすでに動いている。我らの仲間がやってくる前に、

あれはきちんと回収しておくんだな」

夢乃が震えて、呻きながら立ちあがったときには、安倍興亜はすでに姿を消していた。空間移動能力でどこかに移動していったのだろう。

———きいいいいいん!!!

黒狼は、少女の鮮やかな剣さばきに一瞬見惚れた。敵意は、少女の想像以上の実力への感心に、そして、美しい炎を纏う少女への憧れに変わる。

炎が、段々青色に変色し始めていた。空気中の酸素と溶けあっているのだ。それほどに、少女が放つ力の純度は高いのだ。

一だからこそ、黒狼は納得できない。

これほどに、少女を美しくさせる「溜火」が、少女を支配しないでいられることが、理解できない。

そして――

「お前は、どうしてそこまで戦う!? たかが一人の人間の為に…魔物に憑かれた体でありながら、なぜそこまでして正気を保つ!？」

「…何も私は、飛鳥の為にここまで苦勞しているわけじゃないよ」少女はにべもなく答える。

「私はただ、好きなことをやりただけかな。ご飯を食べること、友達と遊ぶこと、何より…平穏な世界で生きること…ただ、私が思っていることを実行したいだけ。いいかな? これは、溜火の願いでもあるんだ」

「…!」

満足だと言うのか、溜火。

お前はそれで十分だというのか。

この女を支配せず、この女と共存するというだけで、満ち足りているというのか。

「糞が：瑠火、貴様はそこまで下がったのか！！！」

ありったけの憎しみを刀に込めて、黒狼は天音に突撃する。黒い闇が、槍のように天音に迫る。

「————だから、邪魔をしないでくれるかな」

天音の体を、青い炎が完全に包み込む。それは、黒狼よりも早く、まるで炎のレーザーのように、彼を迎撃した。

まるで、特撮映画のようだった。

夢乃は、窓に駆け寄って、空中の交戦の様子を見上げた。その戦いに、介入などできるはずがなかった。見惚れるだけで、精いっぱいだった。

彼女は炎を纏っていた。その炎は、最初は明るい橙色に輝いていたが、輝きの色が変わり、明るい青色の輝きが夢乃の目を突き刺す。夢乃が眩しさのあまり両手で顔を覆っている間に、全ては終わっていた。

光が消えた後に、空中に立つ二人の立場は、完全に逆転していた。天音が、黒服の男の襟首をつかみ、険しい表情で何かを問いかけている。

「水流飛鳥をどこに連れて行った？」

「…大江山、だ…今も昔も、そこは、百鬼の本拠地だ…」

「…そう」

しかし、黒狼は最後まで悪あがきを忘れなかった。人型をなくし、闇に包まれた刀の姿に還ってでも、溜火を殺したくて殺したくてしようがなかったのだ。

「っ…!?!」

一警戒を解いていたのがいけなかったな、女!! 溜火もろとも消えるがいい!!!

躊躇した天音の隙をついた、つもりだった。しかし、彼の最後の一撃は、第三者によって阻まれる。

黄緑色に輝く、結界の平面だった。

結界が、黒狼の妖気を察知して、徹底的な排除を始める。その上から、天音がとどめを刺そうと刀を振りかぶった。

「…これから、どうするの、アスター」

「君も狙われているから、しばらくは身を隠した方がいい…ん？」

「どうしたの？」

「…君、試しにコップを割ってみて」

「はあ…? なんで…」

華は傍にあったコップに、「割れろ」と念じた。しかし――――

何も、起こらない。

「あ…あれ…?」

「君は…能力をなくしたのか？」

「もしかして、さっき、この能力は「要らない」って思ったけど…まさか、それで能力自体が無くなるものなのかしら!？」

アスターの顔が、喜びに彩られた。

「これでもう、君は人を殺さない」

そんなに喜ばれても、華は自ら能力を無くしたことになかなか実感が湧かない。

「戻れるのかしら：元の私に。でも：もう遅いのか」

「何が？」

「あなたは単純に私のことを信じてくれるけど、残念ね。私、本物の人殺しよ」

「：その話はよそう」

「どうしてよ。私は本当のこと言っているのよ！」

「君が人殺しをするようになったのは、その能力で間違って両親を殺したからだろ」

「なんで知っているの！？」

「古い日記。読ませてもらったよ。君の部屋をいろいろ探ってたらあったんだ」

ストーリーカーのような行動をしているとは分かっていた。

しかし、彼は、天音から全く違う視点の話を聴いた後、華のいない隙に華が住んでいる部屋がある高級マンションに忍び込み、彼女の自室にも忍び込んで、いろいろ探っていた。何か、本当の真実を知ることができる、アルバムとか、日記とか、そういうものはないだろうか？

彼は全ての言語を解読することができる。華が転生するたびに、彼は彼女の魂の転生先を追いかけて、世界各地を旅していたからだ。そうして、彼は見つけてしまった。

彼女が初めての殺人をしたことが、綴られた古い日記を。

例えば親にちょっとした原因で激しく叱られて、怒りと不満のあまり、「死ねばいいのに」と願ってしまったとしたら。その願いを、「思考実現能力」が現実化させてしまったら。

朝起きると、親が二人とも死んでいて、その原因を知ってしまったら。

華はどんなに苦しんだことだろう。

心がどんなに傷ついてしまったことだろう。

「…な、何よ…それが、何だって、わけ？も、もうあの日から、何年も経った…べ、つに、私はっ…」

「じゃあ、なんで君は泣いているんだ」

「え…？」

華は、半信半疑で目元に手をやった。みると、指先が濡れている。

この私が、泣いている？華にとっては、信じられないことだった。

第6節 覚悟はあるか

「…逃げた、のかな…?」

彼女が纏っていた炎が、薄らいで消えていった。

天音はきよろきよろと、わざとらしい丁寧なしぐさであたりを見回す。目の前にいたはずの男は影も形もなく、ただそこには黒い霞が漂っているだけだった。

「ああ、そう…」

天音は安心したように目をつむると、突然、空中からまっさかさまに転落しはじめた。

「ええっ!? 天音!?!」

夢乃は慌てて円盤に乗って空中を降下し、もうひとつ不完全な圧縮結界を作り出して落下地点に設置する。すると、天音は落下の痛みを味わうことなく、そこに仰向けに着地した。

「大丈夫!? 天音!?!」

「…このぐらいで死なん。夢乃は心配性じゃないかな。奴らは…?」

「うちと、興亜さんが倒した! 天音…本当に大丈夫?」

「大丈夫…それに…あの子の命まで背負いたくないから、私は…」

「あの子って…何?」

「飛鳥が、連れていかれた」

「誰に!?!」

「…酒天童子。場所は大江山」

返答に対して、夢乃は一瞬ぼかんとしていたが、やがて思い直したように頭をかいた。

「そうやな、こんだけ妖怪見せつけられたら、信じるしかないわな…やけど、あんたまさか…単身大江山に乗り込むつもり?」

…そんなことしたら、あのチャラ男が怒り狂うで」

「あゝ…あいつか。いざという時に男らしい振る舞いやってくれ

るんか？逃げ出しそうなタイプに見えるかな」

「そんなことないでーほら、覚えてるやろ？飛鳥って可愛いからさー、よう男が寄ってくるやん。その延長で、やらしい男に誘拐された時…」

「ああー…」

それは、飛鳥が中学2年の時で、まだ記憶に新しい。いつも飛鳥をストーカーしていた沢口昇は、それに気づいて自らの拳で不良に大けがを負わせ、飛鳥の退路を切り開いて彼女を連れ帰ってきたのだ。

「もう、すぐ近くに来ているみたいだ…」

天音は、笑って振り向く。兎小屋の残骸の向こうに、一人の男が、笑顔で彼女らを見ていた。

「夢乃ちゃん、今なんていったかな？」

なんて笑顔で聞いてくるが、その目は全く笑っていない。

「まあ、いいや…それより、天音ちゃん。聞きたいことがあるんだけど」

「…見ていたんだね。私が覚醒したのを」

「君のことは知っていた。知らない人が、赤ん坊だった天音ちゃんを「あかる」に連れて来た時…衿子とその人が話しているのを偶然聞いたんだよ」

それを聴いて、天音は戸惑った。知ってたんだ。

まさかと思って夢乃を見ると、夢乃も申し訳なさそうな顔で俯いた。

「…知った。やけど、うちはあんたが危険やとか思ってたへん！」

「俺も、今のところは夢乃ちゃんと同意見だよ？だけどね…君は、何か目的があって僕らと一緒にいたんだろうかって思ってたね」

すっと、人差し指を天音の顔に向けて、彼は言った。

「答えろ。何が目的なんだ。…回答次第では君を殺す」

彼の能力は、相手の精神に干渉して、洗脳したり、幻覚を見せた

りすることだ。時には行動を完全に支配し、自殺行為をさせることで、殺しを行うことができる。魂を持つ者は、皆、精神こころを持っている。よって、彼の能力は魔物にも有効なのだ。

「…何、言っちゃってるのかな？」

珍しく天音がイライラした様子で答えた。そのイライラが、はっきりと怒りのこもった一言に変わっていく。

「何も、目的なんてありやしないって、どうしてわからないのかな？私が戦っているのを見ていたのなら、覚醒したのを見ていたのなら、そこまでの経緯を、理由を、どうして考えようとしなかったのか？」

「……………お前はそこまで脳無しなのかよっ！！15年このかた、私がてめえらを殺そうとしたことなんてあるか！？それでも疑うか、私が信じられないかお前は！！！」

昇は、眉ひとつ動かさずに、しばらく無表情で、激昂する天音を見つめていたが、やがて、疲れたように溜息を吐いて、手を降ろす。その顔は、一転して安堵していた。

「ならいいんだ。怒らせてごめんな、天音ちゃん」

「……」

まだ無表情で昇を睨みつけている天音に、チャラ男特有の爽やかフェイスで応じる昇を、夢乃はどうして分からずに、おろおろする。

「あ、あのさ、喧嘩が終わったのなら…とりあえず、施設の方はどうなったの？」

「施設は無事だ。夢乃ちゃんが周りに結界を張っていたおかげでな」

「ほ、本当に！？」

施設に戻ると、施設の周りの住宅はめっちゃめっちゃになっていたが、百鬼夜行の残党はいないようだった。そこには、妙な熱気が漂っている。

「…悠里」

「よっ、天音」

「あれ、全部悠里がやったのかな？」

「…うん。沢口が手伝ってくれた。その後から殺人二課の人たちが来て…」

「警察の人たちが、せん滅してくれたんだよ。すごいなあ…」

少し陰った表情で彼らは答えた。「あかる」の周りには、なんとか生き残った人たちや、京都府庁から派遣されてきたボランティアの人達が集まってきて、炊き出しを始めていた。施設から散っていくのは、家屋の残骸から一人でも生存者を見つけ出そうとするレスキュー隊だ。

子供達も、段々落ち付きを取り戻してきていた。指導員も、疲れ切っているながらも、安堵の表情を浮かべて炊き出しを手伝っていた。しかし、そこに一人だけ欠けている顔がある。

学校に行ったまま戻ってこない、水流飛鳥だ。

「俺は飛鳥ちゃんを取り戻しに行く。天音ちゃんも、来たいなら来ていいよ」

「私もっ」

「綾小路は残った方がいい。また魔物がやって来た時に、ここにいる全員を守るぐらいの力を持っているのはあんたしかない。僕らだったら、散々動き回らなきゃいけないけど、あんたなら動かずとも守れる」と、瑞島悠里は夢乃を止めた。

「何？悠里も来るの？どうして…」

「え？ああ、僕は…う、うるさいな、なんでもいいだろ、理由なんて…！」と、何故か悠里はイライラした様子で天音の疑問を封じる。それを昇はニヤニヤした様子で見つめていた。

第7節 伝説の迷い家

飛鳥は、見知らぬ暗闇で目を覚ました。一瞬、自分は夢を見ていて、夢から覚めただけだ、「あかる」の自分のベッドで眠っていただけだったという幻想を夢見たが、その幻想は数秒で打ち砕かれた。暗闇の幻想は数秒で霧散し、飛鳥の目の前に現れたのは、見たこともない日本家屋の座敷だった。そこには、飛鳥と同年代の少年少女達が、順序よく並ばされて眠っていた。

「あれ…呪いを、破ったんですか？」

「！」

目を覚ましているのは、飛鳥一人だけかと思われたが、他にもいたらしい。少女は、壁と壁の隅に座り込み、緩やかに顔をあげた。

飛鳥は、危うく、「うわあ…」と声をあげそうになった。

髪はストレートに腰まで降ろしている。顔立ちは、これぞ日本美人と呼べるのではないだろうか。服装は長袖のハイネック、薄いピンク色のトレーナーに、足首がやっと見えるくらいの黒く長いスカートをはいている。青咲天音がクールビューティーだとしたら、この女の子は大和撫子ではないだろうか。

しかし、大和撫子にしては似合わない一点がひとつだけあった。

その目は、一般人の、普通の女の子の目ではない。

「あなたは…」

「皆さんは、目を覚ましません。酒天童子の…呪いによって昏睡させられていますから。呪いを破れるのは、人ではない魔物か、超能力をもった人間だけです」

「えっと、あなたは…」

嘘だ、と飛鳥は思った。この少女からは、同じ特異な力がある者の雰囲気を感じられない。ならば…

「私は橋本美麗。さっきの説明からあなたが考えた通り、私は人間ではありません。だからこうして呪いを破って覚醒したんです。あつ、でも、だけど、そんな風に警戒しないでください：私は、あなたを食べようとは思いませんから：」

「あゝ：あなたと同じ人を知っとるから、大丈夫、ですよ？そんな、怖がったりはしないから」

飛鳥は首を振って言った。

「そう、ですか：」

橋本美麗は、少し安堵した様子でまた俯いた。

「それより、ここはどこ？私：」

「ここからは：出られません。あなたの力では」

「どうしてよ！」

「：京都人なら誰もが知る都市伝説を、ご存知でしょうか。その伝説は、ケータイやパソコンなど、インターネット上でも語り継がれていることです」

「：「繁国寺」：？」

「15年前のあの日：石川悪四郎が率いる百鬼夜行が京都市を闊歩し、多くの人間の命が失われました。その時、歴史があり、参拝者も多く、願いを叶えてくれることで有名だった繁国寺も襲撃されました。その事件を契機に寺は廃れていき、取り壊されることになったのですが、工事の前日に――」

「突然、敷地を残して寺が消えた：まさか！」

「その、まさかですよ」と、美麗は哀しげに微笑んで頷いた。

「ここは、迷い家となり果てた繁国寺。そして、百鬼夜行の本拠地です。私達が脱走しないように、鬼の配下が見張っています」

「じゃあ、何の目的で、私達は！」

「百鬼夜行の力の源にされるんですよ。あなたも含めた、彼らは。特に、常人とは異なる力をもったあなたは、奴らの大好物です。

：だけど：ご安心ください。そんなことは私がさせません」

「え：」

「私はその為に、妖気を徹底的に抑え、ここまでわざと捕まってきました。…あなた、ここから出たいと言っておられましたね。…ならば、私に協力して頂けないでしょうか」

「ええっ!？」

「協力していただけないでしょうか。死を望まないのならば」

「……」

「無理にお願いしているわけではございません。このまま死んでもいいというなら――…」

「死にたくないに決まってる!分かった…協力するわ」

――…

夢乃は、再び土御門興亜の前に立っていた。

「何の用だい?綾小路さん」

興亜は、あの時とは打って変わって柔らかな口調で夢乃に問う。

「あの…酒天童子のことについて、伺いたいです」

「酒天童子…?」

「酒天童子はまだ生きていて、昔に廃れて迷い家になった繁国寺を本拠地に行っているんですね?」

「そうだよ」

「その迷い家は、今はどこで確認されているのでしょうか?」

「…どうしてそこまで酒天童子のことに興味をもつんだい?」

「友人が…酒天童子に連れ去られました」

「それで、助けに行くと」

段々、土御門興亜の表情が険しくなっていくのが見てとれた夢乃は、心の中でガタガタ震えながらも、勇気を振り絞って、「はい」と返事した。

「…それがどれだけ無謀なことか、分かっているのかい?」

「私では…ありません。私の、友人達です」

「そうか…」

興亜は、ふっと険しい表情を消した。

「大切な者の為に動くというのはよいことだ。まだまだ結界術を完全に会得していない君が敵地に踏み込むというのなら私は大反対だがね。はつきり言って、私はどうでもいいんだ。自分の家族、自分の弟子、自分の友人が安全であれば、無謀な若者がむざむざ自分から敵地に踏み込むことなど」

その発言が、興亜がいかにも冷酷な人間かということを表しているわけではないことに、夢乃は気づいていた。興亜にも家族がいることを、友人がいることを夢乃は知っていた。

「まあ、こんな時に、家族など持つべきではないかもしれないけどね」

興亜はそう言って、迷い家が今どこにあるかを夢乃に教えた。

「今のところ、式神に何度探知させても、迷い家は大江山にあることが確認できている」

「ありがとうございます！」

「君の友人達に伝えてくれ。：死ぬなよ」

「：師匠が定義する、私の友人には、青咲天音も含まれているのでしょうか？」

夢乃の問いに、しばらく興亜は考え込むと、頷いた。

「ああ。一応な」

第8節 初めての死闘

百鬼夜行の魔の手は、ついに華のアパートにまで及ぶ。

「アスター！」

「大丈夫だ！」

防犯対策が施された窓ガラスも、異形の襲撃には役に立たない。ガラスが割れた瞬間に、赤い閃光が華に襲いかかるのを、アスターが弾き、二人は窓ガラスの外に舞った。

「くそっ、数が多い…キリがない！」

「だっ、大丈夫！？」

どうするべきか、華は必死で考えた。寺や神社に逃げ込めば安全だが、そこは、きっとアスターを煙たがるだろう。ならばどこに逃げれば――…

（そうだわ、嵐山！あそこならー）

嵐山の寺の住職なら、話を理解してくれることだろう。あそこの寺には、妖怪の「傷」を治す医者も住んでいて、近くの神社では、あの世に逝ってしまった会いたい人の魂を巫女にとり憑かせて会話をするという。

赤い蝙蝠のような翼を羽ばたかせて、アスターは嵐山に向かった。

寺の住職、天浄法師は、近づいてくる妖気にはっと首をあげた。妖気はかなり大きい。しかし彼はそれでも警戒しようとはしなかった。これまで彼の寺に住む食客は、「ぬらりひょん」を患者にしたこともあるからだ。

だから法師は、小僧たちが「また、人外のお客さんです。人のお

客さんも一緒です」と、腑に落ちないような顔つきで報告してくると、「では、お医者様のところにご案内しなさい」と言った。

「それが…医者に診てもらうために来たのではない、直々に法師に会いたい、と」

「どんなお客さんかな？」

「それが…異国の妖のようで。こちらの言葉は普通に話していますが」

「ほお…」

それは珍しい。異国の妖が、こんな山奥の寺に何をしに来たのだろうか？

「よいでしょう。こちらにお通ししなさい」

「はい」

「アスター」

「ん？」

「これでよかったのかしら。もちろんアスターも私も助かって、ハッピーエンドになりそうだけどね…私たちは」

「他の皆を心配してる？」

「心配？…別にあたしはっ！」「認めなよ。それってそういうことじゃん」

「……………」

「私はもともと、一人の人間を取り戻すためにここに来たのですけれど…彼の性格を考えると、絶対に彼らを置いていくわけにはいなくて。」

私は、総大将以外の鬼達を全員斬り捨てる自信がありますから。あなたからは特異な能力を感じ取れるのですが、どんな力を持っていらっしやるのでしょうか」

「えっと…私は…圧力変形かな」

「?どんな力なんですか?」

「えっと、空気を操れる、と言った方がわかりやすいかも。例えば、攻撃が来たら、その方向に空気を一気に集めて、攻撃が来る方向に押し出して反射させる。これだけでかなり攻撃を妨害できるから、捕まった時も最初はそれで逃げただけど…」

「でも、それは酸素も一緒に持っていくわけですから、その間かなり呼吸は苦しくなりますね。まあ、役に立ちそうです。…まもなく奴らが戻ってきますよ」

「ひいっ!?!」

「あなたは私が言った通りにしてくださいね」

「…今鬼達が戻っているのかな」

「全員戻ってから10秒後に入ったほうがいい。今着いて行ったら面倒なことになる」

「なんでわかるのかな?」

「10秒後には、奴らが食糧を引き出して喰べはじめるはずだから」

「…予知できるのかな?」

「うん」

天音の驚きに、悠里は（何故かやや嬉しそうに）答える。

10秒後—…本堂の見張りに立っていた鬼達が、最初のいけにえを引き出した。

（…早すぎてもダメ…遅すぎてもダメ…）

飛鳥は恐怖でガタガタ震えながらも、わずかな理性によって逃げ出したい衝動を抑え込んでいた。鬼達が飛鳥の体を喰らおうとした、あるいは斬り刻もうとした、その瞬間に、飛鳥はその部屋の中の空気を一気に自分の体の周囲にかき集めて彼らを吹き飛ばさなければ

ならない。

おお、ウマそうじゃないか…

しかもこの女、何か能力をもっているらしい。

死んでいるのか？全く抵抗しないし、つついても蹴飛ばしてもちつとも動かない

まあ、その方がいいさ。抵抗されても面倒だしな。

(3、2、1…)

———バアンッ！！！！

(はたして彼らは…空気なしにここに存在していられるのでしょうか？)

彼らは人ではない。しかし、彼らももとはこの世に適合した生物だった。そんな彼らが、周囲から空気を取り去られたら、彼らは生きていられるだろうか？

橋本美麗は、息を止めて一気に飛び出した。

一秒目に一匹を斬り捨て、2秒目に切り刻み、魔物の肉片を眼つぶしとしてもう一匹の魔物に放ち、その魔物をまた斬り捨てる。その繰り返しを、美麗は華麗に行う…はずだった。

「!？」

第三者が斬りかかってくる気配を感じて、美麗はとっさに剣をふるった。

刀と刀が重なって威嚇し合う。

（この気配：私と同じ匂い！？）

同じ真羅刀か？さっきまでこの匂いはわからなかった。よって今自分を攻撃してきた第三者である可能性が高い。

「あなた……彼らと同類ではなさそう。誰？」

「…あなたも、あれとグルなんじゃないかな？」

「まあ、一緒にしないでくださいな。多分私は、あなたと同じような目的でここに来たんでしょうね」

「そうなのかな」

二人はすでに、お互いを殺害対象から外していた。そして、そのまま同じ動作で刀を横に払う。傍にまで接近していた鬼達が一気に吹き飛ばされた。

「水流飛鳥を知らないかな」

「知っています。今あの子も自分で自分の身を守っていることでしょうね。唯一呪いを破ったのはあの子だけ…」

そこまで言ったところで、彼女ははっと何かに気付いたように、振り向いてある方向を見た。天音もその視線を追ったが、煙で視界が遮られてよく見えない。

「…っ！水流飛鳥はまだ生きています。あの子をあなたに託しても問題はありませんか？」

「ああ」

その返事を聴いて、彼女はまた微笑んだが、その表情は蒼ざめていて、笑みにははつきりと焦りが見て取れた。

「もう少しで自分の目的を忘れてしまうところだったわ…失礼します」

ビュン！と、唸るような音を立てて、少女は煙の向こうへ飛び去った。衝撃を受けた床に、小さなクレーターができていたが、そこで驚いている時間が惜しくて、天音は急いで飛鳥を探す。

「飛鳥！飛鳥！」

天音は、背中に悪寒を感じながらも、それを無視して捜す。声の限りに、飛鳥の名前を呼んで呼んで呼んで呼んだ。

「天音…さん？」

よわよわしい、飛鳥の声が聞こえた。煙が、晴れ始める。

(…！？ 空気の流れが、おかしい)

なんだか、体に重い圧力がかかっているような、両肩に重い鉛を背負っているような、そんな感覚。

「よかった…無事、だったんですね」

完全に煙が晴れた。そして、天音はその光景に目を疑う。さっきまで天音が対峙してきた、何体もの魔物達をひつくるめたよりも、醜悪な光景。

空気の圧力が、とある人物にだけ集中して、その人物を押しつぶしていた。文字通り、押し潰していた。体のあらゆる方向から、圧力がかかればどうなるか。その結果が、水流飛鳥の足元にあった。

第9節 方程式

飛鳥の足元には、肉塊が散らばっていた。その肉塊の中で、まだ正常な形を保っているものがあった。

人の首…沢口昇の、首だった。

「何をしたの…飛鳥…うん、飛鳥が、こんなこと、するはず…」
「…彼が…勝手にやったこと…どうして…どうして私にこんなこと…」

飛鳥は、泣いていた。どう見ても、気が狂った精神異常者の目つきはしていなかった。彼女は全身で「殺すつもりなどなかった」と語っていた。

「昇、さんは…私を、守ってくれた。だけど…背の高い、男の人が…昇、さんと、同じような力を持って、た…男の人が、私を…」

「操って、沢口昇を殺させた」

「！」

はっと振り向くと、そこには、学校で出会った「酒天童子」が立っていた。

「すべて、計算のうちに入っていたのさ」

「あな、た…」

「知っているか？ 僕が率いている百鬼の過去を。彼らはね…もともとは、人間だった。どうして彼らが妖になったか、君は知っているか」

「そんなの、知るわけないな…」

溜火と混ざり合う感覚に襲われながらも、天音は強気を崩さない。

「彼らもまた、人間だった頃は、異能力者だったということだ」

「…え？」

「もちろん、自然のものが長く生きて化けてしまった者もいる。しかし、妖に進化する過程で、その木々や水、植物達は、過去の能力者達が持つ「異能の力」の影響を受けた。特に、戦国時代は山の中も戦場になった。落ち武者狩りもあったし、命を狙われる戦国武将が姿を隠した。織田信長や明智光秀、徳川家康なんかは、教科書で習っているだろう？」

「彼らもまた、異能力者だった」

「…!？」

「彼らだけじゃない。平安時代の世から、異能者は存在した。安倍清明に、君を使って僕を殺した四天王の長、源頼光。歴代の異能者は、ゆく先々に、無意識に、「異能の力」を振りまいていた。まともに影響を受けたのが、植物達だ」

影響を受けた植物達が、自我をもち、自由に動き回るようになって、魔物は生まれたのだ。そして、青咲天音や橋本美麗自身も――…
「お前だって、炎の魂と、刀鍛冶の技術に、陰陽師の「異能の力」が加わって生まれてきたんだから、こんな基本的なことは分かっていただろうに」

「…だから、何だ」

「昔から、人が妖に進化する方程式は存在していた。異能者はいつでも、百鬼夜行の材料になりうる。だから、この世の漆黒の樂園を造ることだって、不可能ではない」

「…だから、何だ」

「ただ、ひとつだけ計算外の出来事が生まれてしまったのだよ…真羅刀の存在だ。人が君達を生み出したせいで、「妖が人に退化する」方程式も生じてしまった。

もちろん、その方程式を成立させる「人妖」は君だけではない。「退化」の方程式を消し去るため、そういう輩も含めて、異能者以

外のただの人間は全て消し去らなければならない」

「…なら、どうしてこんなに人間を集めたのかな。彼らはただの人間。狙うなら、私達人妖だけで十分じゃないかな？」

「僕は何も、肝を配下に喰わせる為だけに彼らを捕まえたわけじゃない。彼らは、君のような「人妖」や、君のご友人のような、異能者を集める「エサ」としての役割も持っている。今度は…君達に「エサ」になってもらおうか。僕の本当の狙いは、京都霊的守護機関にして京都府警直属機関の、「殺人二課」だ」

「っ！！！」

「怒り」が彼女の心の中で膨れ上がる。ギチギチギチッ、という金属音がして、彼女の右掌から、溜火の刀身が顔を出した。

全て、嘘だったというのか。

飛鳥をエサに使って、私をここにおびき寄せて、殺す。

そういうことだったのか。

私の友達を、百鬼夜行の一員になんかさせない。

「もう、大丈夫、飛鳥…あんたには二度と、殺人なんかさせない」

「やめなさい、「溜火」。あなたが覚醒めたら、それこそその男の思うつぼです」

「沙羅!？」

「おや…戻ってきたのか。…まあ、そう組んでいたんだけどね」「知っていました…この寺での顛末は、私を陥れる「罠」だということは。そして、私があなたの術中にはまっていることも」

「それでも君は、その子を助けたかったということだね。ほお…美しい友情じゃないか」

「美麗さんっ!？」

「…全く、どうして私をここまで突き動かすのでしょうか、この子は…」

彼女が後ろに背負っているのは、中学生ぐらいの男の子だった。

まるで意識を失っているかのように、状況を何も知らずに、眠っている。

酒天童子は、ふっと笑みを消して言った。

「――真羅刀「沙羅」。その子は目を覚まさない」

「！」

沙羅の顔に、影がよぎる。

「この子に、何をしたのですか」

「死んではない。しかし、その子の命は僕が握っている」

「…この子を人質にとって、貴方は一体私に何を要求なさるつもりかしら」

「死を選ぶか、それとも僕がひきいる百鬼夜行に入るか。楽園の夢は、平安の世からの、僕と僕の父の悲願だった。楽園創設に協力する気はないのか」

「…その選択、は」

美麗の声が、低くなった。

「不公平が、あるように考えられますわね…あなたの提示した条件に従ったとしても、その方法ではこの子の願いを叶えてあげられません…――お断りいたします」

「―そうか…残念だ」

「ううっ!？」

美麗は、急に顔面の左半分を手で押さえてしゃがみこんだ。背中に背負っていた男の子も一緒に落下し、床に転がった。それでもなお、彼は目を覚まさない。

「な…に…!？」

天音の体にも異変が起こる。掌から覗いていた溜火が完全にその刀身を表し、その手に握られたが、どこかがおかしい。

何故、敵であるはずの酒天童子ではなく、橋本美麗に向かって刀

を構えている？

「まだ不完全な真羅刀「瑠火」…人間としての自我を保っていたのが仇になったな。まだ、その自我が残っているのならば、そこにつけ込む隙がある」

（…：沢口と同じ力…催眠能力！？）

そうか。飛鳥はそうして酒天童子に操られて、沢口を殺してしまったのか。

一方、橋本美麗も自分の体の全身にかかる力の全容に気づいていたが、一歩も動くことができない。かつての彼女なら、その力は振り払えた。しかし…：

（これが…っ…人間に、戻り始めて、いると、いうこと…っ！？）人間にも、妖にもなりきれない「人妖」の、盲点を突かれてしまった。

「天音さんっ！」

飛鳥が叫び声をあげて駆け寄ろうとする。しかし、そんな飛鳥を鬼達が捕えた。

———大丈夫だ、天音。

ザシュッ！！と、肉を斬る音が響き渡った。

第10節 覚醒めた想い

天音が、急に反身を返して酒天童子に突撃した。

「何っ!？」

突然のことに戸惑いながらも、酒天童子の部下達が迎撃する。そんな彼らを、彼女は華麗に回転して斬りさばいた。しかし、飛鳥を喰らおうとする妖達に、その刀は届かない。

「やめろおおおお!!!!」

大きな怒声がして、天井が一気に斬り裂かれた。そこから雷撃が奔り、飛鳥を取り囲む妖達を直撃する。

「…遅いぞ、瑞島」

天音が、ニヤアツと笑って顔をあげた。

「…天音、さん？」

「…天音？」

瑞島悠里と水流飛鳥は、その天音の口調と姿に違和感を抱く。そして、その違和感の正体がはっきりした。

そこにいるのは、青咲天音ではない。完璧な、真羅刀「溜火」だった。

「お前っ!!」

「おい、こいつらと一緒にすんなって。俺は、俺を造った「親」の子孫を殺したりなんかしない」

天音の姿で、天音の声音で、彼はせせら笑うように告げる。その時、酒天童子が己の拳を溜火に向かって振り下ろした。刀で防ぎきる時間も与えずに。

しかし、そこで天音のポニーテールがふわりと浮き、次の瞬間、まるで髪の毛が生きているかのように童子の攻撃を受け止める。髪

に施された黒染めが溶けて、ポタリ、ポタリと床に落ちていく。そうして、彼女の赤髪が姿を現した。

一本一本細長い髪の手が、まるで太く赤く焼けた鉄を成しているようだった…

「ぐ、うっ…!?!」

ジュウウツ、と嫌な音がしたかと思うと、酒天童子は飛び退る。その右腕は、真っ赤に焼けただれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0236y/>

少年少女戦闘記

2011年12月17日21時45分発行